

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

From 'The fisherman and his wife' to the Macalisters' story : intimacy in To the Lighthouse

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中土井, 智, NAKADOI, Tomo メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2327

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



童話「漁師と女房」からマカリスト親子の語りへ —『灯台へ』漁師の言説にみる intimacy の変遷—¹

中土井 智

1. 序論

ヴァージニア・ウルフは、そのエッセイ“Mr. Bennet and Mrs. Brown” (1924) で、「本」という媒体が生き延びるためには作者と読者の平等な関係が重要だと述べた²。

In your modesty you seem to consider that writers are of different blood and bone from yourselves; that they know more of Mrs. Brown than you do. Never was there a more fatal mistake. It is the division between reader and writer, this humility on your part, these professional airs and graces on ours, that corrupt and emasculate the books which should be the healthy offspring of a close and equal alliance between us. (*Mr. Bennet and Mrs. Brown* 111 underline mine)

本は作者と読者の密接で平等な関わり合いによってこそ健全に生まれるとウルフは言う。そして、「物語」の健やかさを損なう要素として、情報量の点で、作者が読者よりも圧倒的に有利な立場にあるといった固定観念に、両者が我知らず囚われていることを指摘するのである。書き手とそれを読む者は無色透明なひとつの情報を単に伝達するだけではない。本が本当に意味を持つためには、読者側からの能動的な働きかけが必要なのである。書き手と読み手の共同作業、あるいはコミュニケーションの場としての読

¹ 本論文は第 11 回日本英文学会関西支部大会(2016 年 12 月 17 日、於神戸市外国語大学)における口頭発表「童話『漁師と女房』からマカリスト親子の語りへ—『灯台へ』漁師の言説にみる intimacy の変遷—」を加筆・修正したものである。

² 詳しくは拙論「託された読者—『波』におけるロウダの言葉—」『点描—欧米の文学 VII—欧米言語・文化研究会—』pp. 170-71 参照。

書。そうした作業はウルフの作品においてどのように描かれているのだろう。

読者側がもつ文脈に近づけて読むことで、物語の意味範囲が変化する例は *To the Lighthouse* (1927) (以下『灯台へ』)での挿話グリム童話「漁師と女房」をめぐる見られる。第一部でラムゼイ夫人が息子ジェイムズに読み聞かせるこの童話は、物語の展開とともに、童話内で完結する教訓的な意味や単なる子供の気を紛らわす小道具としての意味範囲を超えていく。たとえば第一部で童話を読み聞かせているラムゼイ夫人は、同時にその童話中の漁師の女房の姿に彼女自身の性格を読む。さらに、我々読者の視点は漁師の女房と漁師の関係と、ラムゼイ夫人と彼女の対人関係とを比較し、「漁師」にまつわるエピソードから、登場人物の人間関係において「私たち」を他のグループから区別する階級という壁の存在を読む。そして第二部を経た第三部では、架空の物語の登場人物であった「漁師」は言葉の中の存在を超え、実在の漁師マカリストア親子として登場し、自身の体験談をラムゼイ氏に語り聞かせるとともに、ラムゼイ親子と協力して灯台へ行き、一家の人間関係に実際に関わってくるのだ。小論では童話「漁師と女房」の意味が、童話を読むラムゼイ夫人の視点、そして本作を読む我々読者の視点が加わることでいかに変化してゆくかをたどり、冒頭に引用したエッセイに示された作者と読者との「密接で平等な」提携を明らかにしたい。

2. 「漁師と女房」が示唆するラムゼイ夫人の「共感」

童話「漁師と女房」は『灯台へ』第一部で、灯台行きの希望を父親に挫かれたジェイムズにラムゼイ夫人が読んで聞かせる場面で登場する。「漁師と女房」のプロットは、貧しい漁師が強欲な妻にせがまれて、ヒラメに姿を変えた王に、より「良い」暮らしにしてくれと何度も頼んだ挙げ句、彼らの際限ない欲望が罰せられて、最終的に元のあばら家暮らしに戻されるというものである。この物語の教訓的なメッセージは「身の程を知れ」だろう。しかし、そうだとすれば、楽しみにしていた灯台行きの期待をくじかれた息子にこの童話を母親が読み聞かせるというのはいかなものか。なぜなら夫人は、息子をなぐさめるふりをしながら、じつは、童話を通して、灯台行きという分を超えた欲望を抑制するように息子を諭していることになるからだ。この小説においてわずかに引用される童話の一節が

She read on: “‘Ah, wife,’ said the man, ‘why should we be King? I do not want to be King.’ ‘Well,’ said the wife, ‘if you won’t be King, I will; go to Flounder, for I will be King.’” (62)³

と、夫が制御しきれない妻の「支配欲」を示すことから、ここでの夫人の朗読には、息子の欲を単に戒めるだけではない、さらなる解釈の余地があるように思われる。

じっさい、夫人は息子に童話を読み聞かせながら、実はほとんどストーリーを気にしていない。目は絵本の文字を追いつつも、心は家の事、夫の事、子供たちの事などへとたゆたっていく。彼女の脳裏にあるのはラムゼイ一家の別荘に集まった若者達、ポールとミンタの関係である。“She was responsible to Minta’s parents”(63)と考える夫人は、二人を結婚させようと計画しているのだが、そんなときふと、ミンタの母親すなわちドイル夫人が夫人に対して言った言葉が思いおこされる。

However, Minta came. . . . Yes, she came, Mrs. Ramsay thought, suspecting some thorn in the tangle of this thought; and disengaging it found it to be this: a woman had once accused her of ‘robbing her of her daughter’s affections’; something Mrs. Doyle had said made her remember that charge again. Wishing to dominate, wishing to interfere, making people do what she wished – that was the charge against her . . . (64)

ポールとミンタの仲をとりもつことは周囲の人たちへの支配欲だというミンタの母親の指摘を思い出し、自分の行いを問い返す夫人。つまり、「漁師と女房」のメッセージは息子のわがままに向けられているのではなく、他者から向けられた“tyrannical, domineering, masterful”(65)という夫人自身に対する評価の真偽の問い直しになっている。彼女が絵本を読み、息子がそれを聞くという関係性は、家族と知己で構成する集団における夫人の穏やかで慈悲深い母親としての役割を象徴的に表すものだ。しかし、同時に、そこで読まれる「漁師と女房」の物語内容は、そのような「善い」母親とは異なる第三者の評価を彼女自身に思い起こさせることで、彼女の人格の負

³ 以下 *To the Lighthouse* からの引用は Virginia Woolf, *To the Lighthouse*. Ed. Stella McNichol (1927; Penguin, 1992) に従い、ページ数のみ記す。

の側面、つまり専制的で他者を支配したがる性質をも示唆するのである。

ポールとミンタの結婚を成就させようとする夫人の意向は、他者の気持ちを想像して相手に“sympathy”、「共感」を与えるという彼女の姿勢を示すものだ。そうした「共感」は、家族に対しても豊かに与えられる。ジェイムズに本を読んで聞かせる行為も、灯台行きの期待をくじかれた彼の沈んだ気持ちに共感し、別の心弾む対象を与えようとする夫人の配慮である。この彼女の他者へのアプローチは、結果的に感情の絆で人々を結び、ひとつの共同体を形成することになる。この共同体の基礎に夫婦関係を据える夫人は、だからこそ仲人業に勤しんでもいる。じっさい夫人は妻の役割を決しておろそかにしたことはなく、できる限りの力を振りしぼって夫に共感を注いでいる。取り立てて何かを言ったり行動したりするわけではないが、傍にすることで夫の自信を高め、安心させる夫人の働きは非常に神経を使うもののようで、“she had only strength enough to move her finger, in exquisite abandonment to exhaustion, across the page of Grimm’s fairy story”(44)という描写が示すように、彼女の心身のエネルギーを消耗してしまう。

夫に働きかける夫人が“as a nurse carrying a light across a dark room assures a fractious child”(43)と乳母に喩えられる一方で、夫は“Filled with her words, like a child who drops off satisfied”(44)と形容されて、「二人の間柄はあからさまに母子の関係になぞらえられて」(矢口 98)いる。このことから、夫人が作り出す共同体は、感情面で他者を自分の「子供」の立場におく、疑似的な母子関係であることが分かる。夫が自分を頼ってくることがあると他者に認識されることを、夫人は恐れているのだが、この危惧こそ、両者の関係において夫が妻に精神的に依存していることの証しだろう。夫の著作の価値を根拠なく称え、時には言葉ではなくその存在自体で夫を安心させ満足させる彼女のその方法が、「共感」であることは疑いがない。他者へ献身するあまり精神面という最も人格の根本的な部分で相手を自分から離れられなくしてしまうラムゼイ夫人の他者へのアプローチは、全く欲を持たないようであり、結果的に彼女が関わる人を自らの影響下に収めてしまうという意味で、実は「漁師と女房」が提示する「女房の支配欲」に通じている。夫人がジェイムズに読み聞かせる「漁師と女房」の物語は、一見とりたてて意味のない、些細な出来事のように見えながら、夫人の存在の核ともいえるべき「共感」が、他者と繋がりを結ぶだけでなく、排他的な意味をも持ち得ると示唆する重要な役割を担っているのだ。

3. 無自覚な戦略としての「共感」

ラムゼイ夫人は共感を軸にして人間関係を拡大しようとするが、『灯台へ』ではその共感の及ぶ範囲に限界があることも示されている。「漁師と女房」の物語では女房は漁師の気持ちを全く無視して自分の要求を彼に押し付けるのだが、その漁師の女房の暴虐ぶりとは対照的かと思われる夫人の共感も、労働者階級に対しては、想像力の欠如により時として相手を傷つける結果になっていることが示唆される。

たとえば、晩餐の席でラムゼイ夫人と客たちが行政について話し合う場面。話題が漁業になったときに、労働者階級出身で祖父が漁師だったタンズリーがここぞとばかりに雄弁を振るい始める。しかし、その彼の話を聞いていたバンクスやリリーたち、そしてラムゼイ夫人までもが、内心は上の空であることが示されるのである。

That the fishing season was bad; that the men were emigrating. They were talking about wages and unemployment. The young man was abusing the government. William Banks . . . heard him say something about ‘one of the most scandalous acts of the present government.’ Lily was listening; Mrs. Ramsay was listening, they were all listening. But already bored, Lily felt that something was lacking; Mr. Banks felt that something was lacking. Pulling her shawl round her, Mrs. Ramsay felt that something was lacking. All of them bending themselves to listen thought, ‘Pray heaven that the inside of my mind may not be exposed,’ for each thought, ‘The others are feeling this. They are outraged and indignant with the government about the fisherman. Whereas, I feel nothing at all.’ (102)

タンズリーにとって漁業は身近な職業だが、学問を糧とするバンクスや芸術を仕事にするリリーにとって、第一次産業はあまり馴染みのない職業である。社会問題に取り組くもうと意気込むラムゼイ夫人も“I feel nothing at all”という言葉が示すように、労働者階級の労働環境に対してさほど切実な問題意識を持ち合わせていない。疎外されたタンズリーは、“He could almost pity these mild cultivated people, who would be blown sky high, like bales of wool and barrels of apples, one of these days by the gunpowder that was in him.” (100) と描かれるように、だからこそ過激な方法で自己を主張しようと考えることがになる。そこには、夫人の「共感」が全く機能しない世界があることが

示されている。

同様のことは、夫人がタンズリーを連れて恵まれない家庭を訪ねに出かける場面からも読み取れる。途中で夫人はサーカスの張り紙を見つけ、何気なく“Let us go to the Circus.”(16) とタンズリーに声をかけるのだが、ぶっきらぼうでつつけんどんな返答しか返って来ない。その原因を彼女は以下のように想像する。

What was wrong with him then? She liked him warmly, at the moment. Had they not been taken, she asked, to circuses when they were children? Never, he answered, as if she asked the very thing he wanted to reply to; had been longing all these days to say, how they did not go to circuses. It was a large family, nine brothers and sisters, and his father was a working man; ‘My father is a chemist, Mrs. Ramsay. He keeps a shop.’ He himself had paid his own way since he was thirteen. . . . He worked hard — seven hours a day; his subject was now the influence of something upon somebody. . . . She could not follow the ugly academic jargon, that rattled itself off so glibly, but said to herself that she saw now why going to the circus had knocked him off his perch, poor little man. . . . What he would have liked, she supposed, would have been to say how he had been to Ibsen with the Ramsays. (16)

サーカスを見に行くのに経済的障壁など感じたことがないであろうラムゼイ夫人がタンズリーにかけた気軽な言葉は、かえって彼の子供時代とラムゼイ一家の生活ぶりとの格差を自覚させ、タンズリーに一気に不満を吐露させる結果になる。彼が勉学面で必死に努力を積み重ねて蓄えた知識を“ugly”と一蹴し、タンズリーの返答のぎこちなさの原因を、演劇を観にいけなかったという文化的貧しさに結びつけて“poor little man”と彼に対する憐れみを一層深くする彼女の共感のあり方は、彼に対する親しみを示しているようでいて、実は個人の努力ではどうすることもできない身分差を改めて是認しているようにも思われてくる。にもかかわらず、リリーとは違ってタンズリーの気持ちを逆なですることなく自らに憧憬を抱かせる彼女の手法は、階級という境界を犯して社会の上層に登ってこようとする他者をあしらう巧妙な手段と解釈できなくもない。

さらに、ラムゼイ夫人はタンズリーとの散歩の場面で、「君主と皇太子と彼らに仕える 24 人の騎士にしか与えられない最古かつ最高位の勲章である」

(井上 43)ガーター勲章をさげたヴィクトリア女王と並んで立ち、夫人は一瞬自身の姿をその像に重ねてもいる。

... suddenly, in she came, stood for a moment silent (as if she had been pretending up there, and for a moment let herself be now), stood quite motionless for a moment against a picture of Queen Victoria wearing the blue ribbon of the Garter; and all at once he realized that it was this: it was this: — she was the most beautiful person he had ever seen. (18)

“the blue ribbon of the Garter”を身につけたヴィクトリア女王の肖像を背にした夫人は、自らを女王と同一化しているかのようだ。じっさい、君主と皇太子に仕える一方で、一国の女王として国民を統治するヴィクトリア女王と、夫や息子たちに「尽く」すのと同時に、彼らを含めてタンズリーたち周囲の人間に求心力を振るう夫人とは、一方が国家レベル、他方が家庭のレベルという違いはあるものの、数多くの類似を見ることができる。ラムゼイ夫人に付与されたこの女王のイメージからも、夫人を階級的支配者として読者に印象づける作者の意図は明らかである⁴。さらに、夫人は冗談交じりではあるものの、“had she not in her veins the blood of that very noble”(13)と語って上流階級と血縁関係があることを示唆し、それを根拠に家柄の高い人たちには敬意を払い、晩餐の席では、客たちに振る舞う料理を祖母から受け継いだフランス料理だと述べて矜持をにじませる。これらの彼女の態度からは、自らの出自への自信と主張が読み取れる。“The real differences, she thought . . . are enough. She had in mind at the moment, rich and poor, high and low”(13)と考えるラムゼイ夫人の人間に対する価値観の基本には、個人が生活する上で身にまとう社会的な差、つまり階級差の肯定があるのだ。ラムゼイ夫人の想像力は、夫人、バンクス、リリーたちといった知識階級の枠組みの内にとどまり、彼女の共感によって生み出される共同体は、生まれによって区別された各々の人々の立場の違いを際立たせ、階級の枠づけを強固にする性格がある。こうして夫人の言動を観察すると、彼女の共感には他者を迎え入れつつ支配するための一種の戦略としての側面がある

⁴井上は、ライオンやトラといったイギリス国外の野生動物を支配し調教するという意味で、サーカスという娯楽は、植民地支配の国内における再現媒体として帝国主義の維持に寄与したと指摘し、ラムゼイ夫人のサーカスに対する肯定的な感情に着目して「Mrs Ramsay は、ヴィクトリア女王を通じて帝国の支配者(かつイギリスの自然)を象徴する存在となっている」(井上 43)と言う。

ことが見えてくる。それは夫人が息子の足に靴下をあててみて短すぎることが分かったときや、自然の万物を眺めるときに生じるような純粋な一体感ではない。他者に対する「憐憫」によって、相手と自分の立場を切り離しつつ他者を傍におく、一種の懐柔である。こうした視点から読むと、「漁師と女房」における女房の専制的な態度は、最終的に自分の意図で他人の振る舞いを左右する夫人の共感作業を戯画化していると解釈できる。つまり童話「漁師と女房」は、ラムゼイ夫人本人も知らず知らずに行使している「感情の支配」といも言うべき隠れた彼女の側面をあぶりだす働きを担っているのだ。

とはいえ、夫人は自分が慣れ親しんでいる共同体の優越性を積極的に強化しようと考えている訳ではない。夫人の理想は、“a private woman”(13)、つまり家庭に閉じこもる人間であることを辞めて、“she wrote down in columns carefully ruled for the purpose wages and spendings, employment and unemployment”(13)と描かれるように、身分の高い低いという問題を超えて雇用の問題に取り組み、それを解決することによって公共の福祉に貢献できる“an investigator, elucidating the social problem”(13)になることである。しかし、このような彼女の社会貢献に関する計画は、結局は実現されず、架空の物語に留まったままである。彼女の話に誰も真剣に耳を貸さないことが、彼女の考えが実際に実行するには非現実的であることをよく示している。

片手間に息子に読み聞かせるおとぎ話のたった数行のフレーズをきっかけに、他者からの批判を思い出し、自らの隠れた支配欲を読み取り冷静に自己反省できる一方で、彼女が生きる現実では知らず知らずのうちに自らの立場を「漁師と女房」たちの生活と差別化し、区別する。ラムゼイ夫人の内面には相反する志向が共存していることが分かる。

Raymond Williams は、『共通文化にむけて』(2013)において、コミュニケーションを組織する方法を①権威主義的方法、②家父長的方法、③商業的方法、④民主的方法の4つに分け、家父長的方法について次のように説明する。

良心的な権威主義システム。支配集団は大多数を遅れたもの、子供の特徴の多くを有するもの、恵まれぬもの、多くの点で不運で準備の整っていないものとみなす。だがこの家父長的方法は、そうした人びとに対して根本的に情け深い態度をもつか、あるいは持っている」と主張し、つねにかなりゆるやかなペースでみずからの優越

性が消えることを待ち望んでいる。(ウィリアムズ 51)

今まで論じてきたラムゼイ夫人のコミュニケーションの方法はこの説明にぴったり当てはまる。ラムゼイ夫人が中心となって構成する共同体では、彼女は、他者を精神的に未熟な、共感を「与えられる者」の立場におき、自らは保護者的な「与える者」の位置につく。それは一見他者に共感を示すようであり、結果的に弱者を憐れみ、自身の立場の優越を確認することになる。ラムゼイ一家にとって夫人は、共感という軸で人間関係を結ぶ絆でありながら、同時に階級的部外者を締め出す防波堤でもあるのだ。夫人が朗読する「漁師と女房」の物語は“the story of the Fisherman and his Wife was like the bass gently accompanying a tune, which now and then ran up unexpectedly into the melody”(63)と音楽の比喩で描かれる。この描写は、子どもたちのにぎやかな声に混ざって時おり聞こえてくる別荘の外の波のリズムと対をなし、彼女の考えを支えているものの正体を明らかにする。

... the monotonous fall of the waves on the beach ... like a ghostly roll of drums remorselessly beat the measure of life, made one think of the destruction of the island and its engulfment in the sea, and warned her whose day had slipped past in one quick doing after another that it was all ephemeral as a rainbow ... (20)

波のリズムを、時世が推移していく比喩と解釈するならば、彼女の声が聞こえる時空間、“the island”は夫人が生きている今、つまり第一次大戦前の、家父長制的倫理を基礎にもつ中産階級的共同体を象徴するかのようだ。しかし、彼女は晩餐会の途中でその席を離れ、ゆっくりとその集団から姿を消す。そのことはまた、夫人がその間をとりもつことで成り立っていた共同体が、彼女の死をもって消失することを象徴的に示している。

夫人の他者に対する精一杯の献身は、知らず知らずのうちに、時代が期待する良妻賢母という役割を夫人が引き受けていることを示すものだ。その一方で「漁師と女房」において女房が漁師の言葉に耳をかさず、互いに意思疎通ができない状態は、奇妙にも夫人の労働者階級の人間に対する理解不足と影響力の限界を映し出す鏡として機能し、結果的に彼女が生み出す共同体に、階級による断絶を彼女自身が作り出すことを示唆すると言えるだろう。

4. 「共感」から協働へ

夫人が亡くなった後の世界を描く物語の第三部において、ふたたび集合した人たちの孤独は深刻である。第一部では、編みかけの靴下をどうか灯台守の子どもに届けたいという望みから、明日灯台行きの船が無事に出るよう願って発せられた夫人の “I expect it will be fine” という言葉は、第三部では、明確な目的を欠いた灯台へ行く行為自体を辛うじて支えている。しかし、何を届ければいいのか分からずうろたえる各々の様子は、まるで彼らが夫人の遺言に振り回されているかのようだ。ラムゼイ氏は過ぎ去りし過去を嘆き、リリーに憐憫を要求するばかり。リリーは夫人の思いを引きつごうと、灯台へ何を届ければいいのか、皆をひとつにまとめるにはどうすればいいのかと考えるが、その考えを、現実の人間を相手に実行しようとはしない。他者に傷つけられるのを恐れる彼女が向かうのは、“her paints” という排他的な世界である。相手の気持ちに配慮し、働きかけて行動する人物がいなため、共同作業を行う原動力は命令になり、親子のコミュニケーションも命令と服従の関係でしかない。

Only James (certainly the Sullen) scowled at the lamp; and Cam screwed her handkerchief round her finger. Then he reminded them that they were going to the Lighthouse to-morrow. They must be ready, in the hall, on the stroke of half-past seven. Then, with his hand on the door, he stopped; he turned upon them. Did they not want to go? he demanded. (162 underline mine)

お互いの気持ちの準備が整ったときに合わせて出発時刻を決めるのではなく、杓子定規にきっかり 7 時半と、規律に従って出発するよう命令するラムゼイ氏は、子どもたちとの間の溝をますます広げていく。“he had forced them to come against their wills”(177)と描かれるように、自身の気持ちを見殺されたと感じるキャムとジェイムズは、航海の失敗を願いさえる。このぎくしゃくした親子関係を取り持ち、灯台行きを実現させるのが、地元漁師マカリスター親子の存在であることは、ラムゼイ夫人がかつて読み聞かせていたのが「漁師と女房」の物語であったことを思い起こせば、重要な意味を示唆するように思われる。

オールの第一手をこぎ出すのはマカリスターの息子で、ラムゼイ氏の一声によって航海は始まる。しかし、支配階級が指示を出し、被支配階級がそれに従うという彼らの関係は、この後、航海を経るにつれて、既存の社

会制度を超えた関係へと発展していく。最初の変化が現れるのは、マカリスト息子の子の舵取りで船が進み始めたときである。ほっとして緊張を解かれたラムゼイ氏は、マカリスト老人にこの地域であったクリスマスの大嵐について訊ねる。漁師と嵐という主題は第一部で夫人がジェイムズに読み聞かせていた「漁師と女房」の物語の中に出て来る嵐を連想させる。もちろん、ここでマカリスト老人が話しているのは実際に彼らが体験した経験だが、聞いているうちにラムゼイ氏が身を乗りだすようにして熱心に耳を傾け、しまいにはマカリストと声の調子まで合わせだし、マカリスト老人の経験談がラムゼイ氏の想像の中で次第に共有されていくことは興味深い。

... how he leant forward, how he brought his voice into tune with Macalister's voice; how, puffing at his pipe, and looking there and there where Macalister pointed, he relished the thought of the storm and the dark night and the fishermen striving there. (179 underline mine)

第一部ではラムゼイ夫人が読み聞かせるおとぎ話の中の架空の存在であった「漁師」の世界は、マカリスト老人が語り、その場面をラムゼイ氏が想像する事で両者の間に階級を超えたある程度の共通認識を生んでいる。一方が物語を伝え、もう一方がそれを聞くという営みは、第一部でラムゼイ夫人がジェイムズに童話を読み聞かせた行動を比喩的に繰り返していると言えるだろう。両者の関係性は全く同一ではないものの、いずれの場合においても、物語を伝える者と受け取る者の物語を介した共同作業が、物語に対する新たな解釈の余地を広げ、その過程で両者のあいだに親しさが生み出されている点で共通している。

何人も死者が出たほどの出来事は、もちろん最初は、当事者ではないラムゼイ氏にとっては所詮他者の経験にすぎない。それは、引用の下線部が示すように、彼が「暗い夜の嵐の海とそこで戦う漁師たちの姿を想像して愉しんでいる」と描かれることから明らかである。ところが船を進め、実際に波の揺れを肌で感じ海の風に当たると、自分だけの世界に酔いしれるときしばしば諳んじていた“We perished”、“each alone”という詩句がいかにも現実からかけ離れた白々しいもののように見えてきたのか、吟じることに急な後悔とも恥ずかしさとも言えない居心地の悪さを感じ、徐々にその口調は小さくなっていく。そして、漁師たちが嵐との闘いの末に亡くなった現場に立ち会い、マカリスト親子からふたたび大嵐の話の聞かされ

たとき、もはやラムゼイ氏は“Ah”(223)と言つぶやくだけだ⁵。

ウルフ作品では、詩を引用することで深く蟠っている心情を象徴的且つ端的に表す登場人物が複数人見られる。『ダロウェイ夫人』のクラリッサや『幕間』でのアイサが印象的である。『灯台へ』でラムゼイ氏は各所で、他の登場人物よりはやや自覚的に詩の朗読を繰り返す。ここでラムゼイ氏が引用する William Cowper の詩“The Castaway”の意義を、ラムゼイ一家のモデルであるスティーヴン一家の伝記的事実との類似性に注目して説明している Roger D. Lund は、ラムゼイ氏が思わず朗吟する“We perished”、“each alone”という詩句は、ラムゼイ氏自身の失敗に対する恐怖と孤独を象徴的に示していると言う⁶。確かにラムゼイ氏は常に自分の仕事やその成果である著作の栄光が後世にどれほど続くかという事を心配していた。思索を積み重ねる哲学者らしく、氏は明晰な頭脳が思索して到達する段階をAからZに喩え、自らの立場をQと見なし、さらにその先へ進まんとする自分の学究態度を、登山隊を先導する孤独なリーダーに喩えていた。

He stood stock still, by the urn, with the geranium flowering over it. How many men in a thousand million, he asked himself, reach Z after all? Surely the leader of a forlorn hope may ask himself that, and answer, without treachery to the expedition behind him, ‘One perhaps’. One in a generation. Is he to be blamed then if he is not that one? provided he has toiled honestly, given to the best of his power, till he has no more left to give? And his fame lasts how long? It is permissible even for a dying hero to think before he dies how men will speak of him hereafter. . . . The very stone one kicks with one’s boot will outlast Shakespeare. His own little light would shine, not very brightly, for a year or two, and would then be merged in some bigger light, and that in a bigger still. (40-41)

この場面には、山高く登ったリーダーが額に手を当て姿勢を正した格好でこと切れた状態を捜索隊に発見されるだろうという描写が続くのだが、これらの表現からわかるように、氏は自分の力不足が罰に値すると見なす程

⁵ ラムゼイ氏の朗吟については、氏の自己憐憫、自己陶醉であるという意見がある一方で、ここの箇所ではキャムが知らず知らずのうちに氏の朗吟を繰り返しているため、親子間の和解につながっているという意見もある。(Harada 67)

⁶ ‘Indeed so powerful is Cowper’s story, symbolically embedded in “The Castaway,” that in a variety of significant ways it serves as a literary precursor to Woolf’s portrait of Mr. Ramsay, a soul who seems similarly tortured by his own fears of failure and isolation.’ (Lund 80)

ストイックに自分の仕事の真価について考えると同時に、大げさな彼の姿からは、独りよがりのナルシシズムが読み取れる。

彼にとって本を読み、思索する営みは「精神的に孤独な状況」を確認する行為である。つまり、彼が詩を朗読し不安や恐怖を吐露するという行為は、逆説的にそのような「自分だけの精神世界」を持っている証拠である。このような世界観を肯定しつつ、実際の日常生活においては人間関係の調整をしてくれていた夫人という存在を失った今、ラムゼイの自己憐憫の意味を見抜いているキャムは、無心に読書に没頭するような氏の態度に対して的確に“*It was thus that he escaped*”(220)と言い表している。

しかし、今マカリスト親子たちと共に海にでて、現実には船が難破した現場を目の当たりにしてラムゼイ氏は自己憐憫をしなくなった、いや、できなくなったと言うべきだろうか。ラムゼイ氏はここで、文壇の中にいる自分ではなく、現実の自然の中にいる自分を確認している。自らが居合わせている状況を解釈することで自分の世界観に引きこもるのではなく、ただそこに居るという姿勢は、ラムゼイ氏にとってひとつの新しい現実の発見を示すものだろう。彼はひとつの「場」を他者と共有するという共感のあり方をマカリスト親子との交流を通して見出したと言えるのではないだろうか。

一方、キャムとジェイムズは航海の間にそれぞれにとっての現実をとらえ直そうとする。その過程で、彼らが属するとみなす集団や、彼らが共感する対象に変化が見られることを実感する。たとえばキャムは、幼かった頃に慣れ親しんでいた日常の風景が遠のいていくように感じる一方で、航海をしている今そばにいる人や物、つまり、マカリスト老人や、船の質感、波の音に親しみと現実感を覚えはじめる。

She was thinking how all those paths and the lawn, thick and knotted with the lives they had lived there, were gone: were rubbed out; were past; were unreal, and now this was real; the boat and the sail with its patch; Macalister with his earrings; the noise of the waves — all this was real. (181-182)

生前ラムゼイ夫人によって守られてきた暮らしが“unreal”なものになり、それらに代わってマカリスト親子や波といった、第一部では共同体の外に位置付けられていた人・物が現実になるというキャムは、今や家族という共同体よりも、同じ船に乗り、同じ風景・音・目的を共有する人達との親

和性をより身近に感じていると思われる。

一方ジェイムズは、船が灯台に近づくにつれて、夫人の語りかけによって期待に彩られた夢として記憶されていた灯台が実は“stark and straight” (202)である事実を確認し、“washing spread on the rocks to dry” (202)と描かれる自然に晒されたあらわな日常世界を認識することになる。ジェイムズの気持ちに寄り添った夫人の言葉によって紡がれていた世界が失われ、彼がその瞬間に居合わせる場所の客観的な実情が淡々と示されている。

キャムやジェイムズが目当たりにする現実、そのいずれもが、下層の人々の生活に直結した粗野で荒々しいものである。第一部では童話という架空の一登場人物、あるいは、ひととき会話の話題としてのみ存在し、一家にとって遠く離れた存在でしかなかった「漁師」は、第三部に差し掛かると一家の現実の一部となり、身近な存在になってくる。換言すれば、これらは第一部で描かれるラムゼイ一家を中心とした共同体の外にあった労働者階級の日常である。

大衆的日常が現実に入侵して来る過程は、実はリリーの絵画制作においても見ることができる。リリーは、キャンバスの上に、自分に見える現実を象徴的な形で表現しようと試みてきたのだが、夫人が亡くなった後では、夫人の姿の代わりに、誰か別の人の顔や、新聞売りの少年の声を捉えることになるのである。

She looked down the railway carriage, the omnibus; took a line from shoulder or cheek; looked at the windows opposite; at Piccadilly, lamp-strung in the evening. All had been part of the field of death. But always something — it might be a face, a voice, a paper boy crying *Standard, News* — thrust through, snubbed her, waked her, required and got in the end an effort of attention, so that the vision must be perpetually remade. (197)

制作過程で自分の内面に没頭しようとしているにも関わらず、リリーは、外の騒がしい状況に気を取られて、仕方なくそちらへ注意を向ける羽目になってしまう。新聞売りが売っている *Standard* や *News* はいわゆる大衆紙である。ここにも、象徴的に労働者階級の現実を無視できなくなってきた時代の変化が示されていると言えるのではないだろうか⁷。

⁷ 共同体における階級間の軋轢を『ダロウェイ夫人』を題材に、それぞれの共同体が出す音

注目すべきは、このような階級間の出会いが否定的に描かれてはいないことだ。ラムゼイ一家の灯台行きは、マカリスト親子が先導し、ジェームズがかじを取るというように、両者の共同作業によって果たされている⁸。また、モデルであった夫人の不在のために絵が描けず思い悩んでいたリリーが、描けると確信し、制作が完成に向かうきっかけも、

She seemed to be standing up to the lips in some substance, to move and float and sink in it, yes, for these waters were unfathomably deep. Into them had spilled so many lives. The Ramsays'; the children's; and all sorts of waifs and strays of things besides. A washerwoman with her basket; a rook; a red-hot poker; the purples and grey-greens of flowers: some common feeling which held the whole together. (208)

とあるように、異質なものの混淆によってもたらされる。ここでリリーを浸す水は、一登場人物であるリリーだけではない、作家自身の詩的源泉の比喻と解釈しても差し支えないだろう。多様な人々の生が注ぎ込まれたその水は、ラムゼイ一家ばかりではない、“a washerwoman with her basket”(208)までもを包括し、それらを“some common feeling”によって結びつけているのだ。ラムゼイ親子の灯台行きを実現させ、リリーが創作活動の基盤とするのは、階級的な区別を取り去った他者との緩やかな連帯、すなわち、より広い普遍性を持った文化を育む土壌としての「協働体⁹」の存在なのである。

5. まとめ

『灯台へ』において作者と読者の関係は、1つ目に作者代理としての語り手ラムゼイ夫人とそれを聞くジェームズ、2つ目に「漁師と女房」のテキストに自己の在り方を読むラムゼイ夫人、さらには小説の読者、そして3つ目に比喻的な読書としての語り部マカリスト老人とラムゼイ氏に見られ

の違いから例証した論文がある(小室龍之介「都市騒音の政治学：階級、外国人嫌いをめぐる『ダロウェイ夫人』の一考察」『上智英語文学研究=Sophia English Studies』pp.3-18)。

⁸ラムゼイ、マカリスト両親子の航海の成功には、ラムゼイ一家と友人たちが再び集まれるように別荘の管理をしたマクナブ婆さんやバスト婆さんの働きは欠かせない。

⁹筆者が「協働体」と示した概念は、平田オリザが提唱する「関心共同体」という考えにアイディアを得ている。平田は『新しい共同体をつくる』(2013)という著書で、日本の現状をモデルにして、これからは個人と社会が切り結ぶ関係として、伝統的な「地縁血縁形共同体」、利益に基づいた「利益共同体」に加えて、この両者の中間に自由に離脱が可能な、趣味や趣向によって集まり、離合集散を繰り返す集団「関心共同体」と呼ぶ共同体を提唱している。

た。これら三様の「読書」にはすべて、本作冒頭で与えられる童話「漁師と女房」がその関わり方を変化させつつ関連していた。

童話「漁師と女房」は親子がふれあう場面を表すための単なる小道具に留まらず、読者ラムゼイ夫人が物語に積極的に関わることを通して自身のあり方を内省するための媒体となり、夫人が他者との関係を結ぶ際の重要な手掛かりであった「共感」が孕む意味の重層性と限界とを暴いている。さらに、「漁師」という言葉は、我々読者が『灯台へ』を読み進めるなかで、労働者階級を表す記号として機能しはじめ、知的労働に携わる中産階級と一次産業に従事する労働者階級の間に存在する隔たりをも浮き彫りにする。童話を読む声の調子は、夫人が居る島の外から聞こえてくる波の音と共鳴し、少しずつ、ラムゼイ一家を中心とする中産階級共同体の外にある現実の存在を知らせる役割を果たした。ラムゼイ夫人の死後第三部では、一家にとって漁師という存在は架空の存在ではなくなり、マカリストー親子という語り部を得て、灯台へ行くという一家の目的を共有し、それを推進する協力者となった。つまりこの童話は、階級を基準にして構成されていた一つの共同体が、一時的ではあるが、同じ目的に向かって行動する者同士の「協働体」とも言うべき集団へと変化する道筋を示していると言えるのである。「漁師と女房」の物語は、人間が作り出す共同体の基盤とその変遷の過程を明らかにするのである。

一方が語り、他方が聞くという関係は集団の間に親しみ(intimacy)の感覚を生み出す。第一部で「漁師と女房」を読むラムゼイ夫人と聞き手ジェイムズの間には血縁の親子間の絆としての親しみが読み取れた。これは同一階級内の家族共同体を前提として生じていた。

他方マカリストー老人が漁師たちの雄姿を伝える逸話をラムゼイ氏に話した際に生じた両者間の親しみは、灯台へ行くという共同作業を元に生じたもので、同じ目的を共有して生まれる絆であった。これは既存の社会的制度に基づいた前者のそれとは違い、個人対個人の人間関係において認められたものである。ここでの親しみには、物語を聞こうとするラムゼイ氏の働きかけをきっかけとして、互いの社会的立場の違いに邪魔されない想像力が必要である。特に読者側であるラムゼイ氏からの能動的な働きかけを必要とすると考えられる。ラムゼイ親子とマカリストー親子が灯台に到達したと思われる瞬間にリリーがビジョンをつかむ事からも、たとえ一瞬のものであろうと、ラムゼイ氏とマカリストー氏が作り上げた関係に作者ウルフが“**Mr. Bennet and Mrs. Brown**”の中で理想として示した「作者と読者の密接で平等な関わりあい」を提示したと考えたい。

参考文献

- Chan, Evelyn Tsz Yan. *Virginia Woolf and the Professions*. Cambridge UP, 2014.
- Harada, Hiromi. “One Could Say What One Meant: Communicating Feelings in *To the Lighthouse*” 『九大英文学』 56 (2014): 59-70.
- Lund, Roger D. “We Perished Each Alone: “The Castaway” and *To the Lighthouse*.” *Journal of Modern Literature* 16.1 (1989): 75-92.
- Woolf, Virginia. *A Room of One's Own and Three Guineas*. 1928. 1938. Oxford UP, 2008.
- . *The Captain's Death Bed and Other Essays*. 1950. Hogarth, 1981.
- . *The Common Reader*. Hogarth, 1951.
- . *To the Lighthouse*. 1927. Ed. Stella McNichol. Penguin, 1992.
- 井上美雪「勤勉がエンターテインメントになるとき—ヴァージニア・ウルフの『灯台へ』における帝国・サーカス・慈善活動—」『東洋大学社会学部紀要』 51.2 (2014): 39-50.
- ウィリアムズ、レイモンド『共通文化にむけて—文化研究 I—』川端康雄、大貫隆史、河野真太郎、近藤康裕、田中裕介訳、川端康雄編 みすず書房、2013。
- ウルフ、ヴァージニア『灯台へ』御輿哲也訳、岩波書店、2004。
- 一.『灯台へ』鴻巣友季子訳、河出書房新社、2009。
- 小室龍之介「都市騒音の政治学：階級、外国人嫌いをめぐる『ダロウェイ夫人』の一考察」『上智英語文学研究=Sophia English Studies』 38 (2013): 3-18。
- 中土井 智「託された読者—『波』におけるロウダの言葉—」『点描—欧米の文学 VII 欧米言語・文化研究会—』大阪教育図書、2016、115-173。
- 平田オリザ『新しい広場をつくる—市民芸術概論綱要—』岩波書店、2013。
- 一.『下り坂をそろそろと下る』講談社現代新書、2016。
- 矢口朱美「距離というものには大変な力が—『灯台へ』に見る労働者としての「母」と子どもの観察運動—」河野真太郎、麻生えりか、秦邦生、松永典子編『終わらないフェミニズム—「働く」女たちの言葉と欲望—』研究社、2016、93-118。

Keywords: 読者 共同体 コミュニケーション 階級 ウルフ